

特集(寄稿とアンケート) 平和教育の実践

—事例・考えを共有する—

キリスト教精神に基づく平和教育の展開 —事例・考えを共有する—

金 清洛

本学院は1886年

の創立以来、「CUM DEO LABORAMUS (我らは神と共に働く者なり)・コリントの信徒への手紙一3章9節(口語訳)」という学院聖句を土台に、キリスト教に基づく女子教育を実践してきた。その歩みを鑑みると、言葉では表せない様々な苦難・試練があった。特に1945年8月6日、本校は爆心地から約1.1kmという至近距離で被爆し、350名を超える生徒・教職員の尊い命が失われた。この悲劇的な歴史こそが本校の平和教育の原点であり、これは単なる知識の習得に留まらず、「神と共に働く者」として平和を創り出す」という「究極的関心」として宗教的・倫理的使命へと昇華されている。

「積極的平和」の射程
本校では毎朝行われる礼拝や聖書の授業に加えて、キリスト教に関する様々な年間行事が実践されている。「8・6平和記念礼

戦後80年の年度が間もなく終わります。今号では平和(戦争と平和)教育の実践や考え方について加盟校関係者から寄せられた報告とアンケート結果を紹介します。

多角的な平和学習プログラム

本校の平和教育は学年の学びに応じた体系的なカリキュラムで構成される。中1「本校と原爆」、中2「長崎」、中3「世界の多様な原爆観」、高1「真珠湾攻撃」、高2「沖縄」、高3「現代の問題」をテーマとし、年間を通じて外国にルーツを持つ人々や被差別部落問題などの人権学習も展開する。特筆すべきは、中高で継続する「被爆証言の継承と発信」である。高校の平和署名活動や海外研修などの国際交流では、広島被害だけでなく核兵器保持の社会的背景や日本の加害の歴史も分析する。「ヒロシマ」という地域性を、世界の人権や正義という普遍的な文脈に接続させ、貧困や差別といった構造的暴力の克服を目指す「積極的平和」の教育的アプローチを実践している。

本校では毎朝行われる礼拝や聖書の授業に加えて、キリスト教に関する様々な年間行事が実践されている。「8・6平和記念礼

本校の平和教育は学年の学びに応じた体系的なカリキュラムで構成される。中1「本校と原爆」、中2「長崎」、中3「世界の多様な原爆観」、高1「真珠湾攻撃」、高2「沖縄」、高3「現代の問題」をテーマとし、年間を通じて外国にルーツを持つ人々や被差別部落問題などの人権学習も展開する。特筆すべきは、中高で継続する「被爆証言の継承と発信」である。高校の平和署名活動や海外研修などの国際交流では、広島被害だけでなく核兵器保持の社会的背景や日本の加害の歴史も分析する。「ヒロシマ」という地域性を、世界の人権や正義という普遍的な文脈に接続させ、貧困や差別といった構造的暴力の克服を目指す「積極的平和」の教育的アプローチを実践している。

「共感」に基づき
平和教育の実践において、本校が最も重視しているのが「共感」

の涵養である。本校の平和学習は校内に留まらず、国内外から訪れる10校以上の学校と積極的に交流している。平和記念公園での「慰霊碑案内」や、8月6日前の「ピースフォーラム」を通じ、現代社会に求められる平和実現に向けた「共に知る・共に知る」取り組みを展開している。また、ルーテル学院中高、同志社大学、関西学院大学、そして平安女学院中高では全日制・単位制ミルトスコースを問わず本校教員が赴き、平和学習の講演を行うなど、共感に基づく協働の輪を広げている。さらに、中1生から高3生まで学年を跨った生徒有志による「碑めぐり案内ボランティア」活動も、平和学習の核として主体的に行われている。こうした生徒による主体的なボランティア活動は、平和に対して本校が掲げる「究極的関心」の表れであり、教育の枠を超えた平和への実践的な歩みとなっている。

「共感」に基づき
平和教育の実践において、本校が最も重視しているのが「共感」

の涵養である。本校の平和学習は校内に留まらず、国内外から訪れる10校以上の学校と積極的に交流している。平和記念公園での「慰霊碑案内」や、8月6日前の「ピースフォーラム」を通じ、現代社会に求められる平和実現に向けた「共に知る・共に知る」取り組みを展開している。また、ルーテル学院中高、同志社大学、関西学院大学、そして平安女学院中高では全日制・単位制ミルトスコースを問わず本校教員が赴き、平和学習の講演を行うなど、共感に基づく協働の輪を広げている。さらに、中1生から高3生まで学年を跨った生徒有志による「碑めぐり案内ボランティア」活動も、平和学習の核として主体的に行われている。こうした生徒による主体的なボランティア活動は、平和に対して本校が掲げる「究極的関心」の表れであり、教育の枠を超えた平和への実践的な歩みとなっている。

沖繩キリスト教学院における平和教育の実践

沖繩キリスト教学院大学 准教授 仲里 和花



碑めぐりボランティア活動

まず、キリスト教活動の取り組みについて宗教部では、「平和」学習の一環として、沖縄戦や米軍基地問題について学ぶ機会を学生たちに提供してきました。例えば、強制集団死のあった渡嘉敷島で長年実施されていた新生フレッシュマンキャンプでは、その悲惨な経験を持つ第三代学長の金城重明先生を講師として招き、その経験を聴きました。夏季キャンプでは、沖縄戦の戦跡巡り、新基地建设が進む辺野古や高江での座り込み活動への参加を通して学ぶことを伝統としてきました。

また、歴史教育の環境として、日本がアジア諸国を植民地化してきた負の歴史を学ぶため、海外での交流平和キャンプを企画し、日本の旧植民地であった台湾や韓国を訪問してきました。台湾では、台湾長老教会の協力のもと、ブヌン・アミ・タイヤル族などの先住民教会を拠点に、その文化と歴史と沖縄との関係等の学びを行いました。韓国では、植民地時代の関連施設を訪問、神社参拝の強制や独立運動への弾圧、日本軍「慰安婦」の問題、民主化運動の拠点として知られるヒョアン教会との交流を通して、信仰と政治との関係を学びました。

加えて、本学の英語コミュニケーション学科・グローバル研究領域では、地球市民の一員としての意識を育むことを目的に、「開発教育」に重点を置いた海外研修を実施しています。アジアボランティア研修では、ベトナム戦争で激戦地となったラオス南部の小学校での学習支援や、フィリピン・マニラにあるマザーテレサの施設でのボランティア活動に取り組まれました。発展途上国を訪れ、ボランティア活動を通して現地の人々と交流すること

で異文化理解を深め、地球市民としての自

の涵養である。本校の平和学習は校内に留まらず、国内外から訪れる10校以上の学校と積極的に交流している。平和記念公園での「慰霊碑案内」や、8月6日前の「ピースフォーラム」を通じ、現代社会に求められる平和実現に向けた「共に知る・共に知る」取り組みを展開している。また、ルーテル学院中高、同志社大学、関西学院大学、そして平安女学院中高では全日制・単位制ミルトスコースを問わず本校教員が赴き、平和学習の講演を行うなど、共感に基づく協働の輪を広げている。さらに、中1生から高3生まで学年を跨った生徒有志による「碑めぐり案内ボランティア」活動も、平和学習の核として主体的に行われている。こうした生徒による主体的なボランティア活動は、平和に対して本校が掲げる「究極的関心」の表れであり、教育の枠を超えた平和への実践的な歩みとなっている。

また、歴史教育の環境として、日本がアジア諸国を植民地化してきた負の歴史を学ぶため、海外での交流平和キャンプを企画し、日本の旧植民地であった台湾や韓国を訪問してきました。台湾では、台湾長老教会の協力のもと、ブヌン・アミ・タイヤル族などの先住民教会を拠点に、その文化と歴史と沖縄との関係等の学びを行いました。韓国では、植民地時代の関連施設を訪問、神社参拝の強制や独立運動への弾圧、日本軍「慰安婦」の問題、民主化運動の拠点として知られるヒョアン教会との交流を通して、信仰と政治との関係を学びました。

加えて、本学の英語コミュニケーション学科・グローバル研究領域では、地球市民の一員としての意識を育むことを目的に、「開発教育」に重点を置いた海外研修を実施しています。アジアボランティア研修では、ベトナム戦争で激戦地となったラオス南部の小学校での学習支援や、フィリピン・マニラにあるマザーテレサの施設でのボランティア活動に取り組まれました。発展途上国を訪れ、ボランティア活動を通して現地の人々と交流すること

アンケートの全回答を教育同盟HPで閲覧できます。(行事の詳細や講師等の情報も載っています。)右のQRコードから、又は同盟HP「緊急ニュース/お知らせ」から入れます。



【キーワード(複数回答)】
◇協力くださる戦争体験者や語り部の減少
◇教職員間の「平和」の意識の違いや連携の弱さ(目的や意義の共有の難しさ)
◇活動のための費用や時間の制約
◇プログラムや資料のマンネリ化
◇戦争に対する当事者意識の希薄化
◇政治的傾向や価値観の対立

【コメントより】
・現在の世界状況は、聖書の神が平和の神であることを伝えにくくしている
・児童の思いが巷の情報や大きい声の意見に偏ることがないよう、教員の舵取りが必要
・戦争の話や画像への拒否反応もある
・「正しさ」を教える教育になりやすい
・軍力強化で不安を解消する(=疑いと不安の増強)ことに陥らない「剣に頼らない道」をいかに真剣に伝えられるか

・聖書における「シャローム」の社会的実践を考える
・多文化理解等を深める繋がりを持つ
・「祈り」の存在：特に執り成しの祈り、他者のための祈りの重要性を伝えたい

【考察(アンケートより)】
今回のアンケートに対して、小学校7件、中高35件、大学16件、学園1件の計59件の回答が寄せられた。戦後80年を意識した平和教育の実践を行った学校は48校で8割以上に上る。具体的には夏の時期の戦争と平和に関する特別礼拝や、長崎、広島、沖縄への平和研修旅行が多数であった。他の例として、韓国やフィリピンなど海外での国際平和交流、聖書授業における憲法9条に関するディベート、平和教育に特化したカリキュラムの作成、平和宣言の作成、演劇部による戦時下の状況を上演し、全校生徒で観劇するなど興味深い回答も寄せられた。

【意見(平和教育の実践について)】
・他のキリスト教学校と平和教育の実践を交流し共有する/同じ時に祈りたい
・歴史科教員として、歴史教育も平和教育の一環であると意識する(近代史上で戦争を避け得た選択を見いだすことも平和教育の一端ではないか)
・平和や人権を前向きに語る難しさすらある社会/国際環境の中でもそれらを堂々と語れるのは、キリスト教を基盤とし、建学の精神にそれを掲げているから。キリスト教教育が社会から信頼・支持されることが極めて重要と思う
・生徒たちが将来「平和を造り出す者」になるための対話をしていくことが大切
・教職員も学生も忙しすぎる現実はあるが、このような状況だからこそ立ち止まる時を確保して「いのち」「平和」を共に考え、祈る時間が必要ではないか
・聖書に書かれたこと=主イエスの教えを徹底するしかないと思う

また、歴史教育の環境として、日本がアジア諸国を植民地化してきた負の歴史を学ぶため、海外での交流平和キャンプを企画し、日本の旧植民地であった台湾や韓国を訪問してきました。台湾では、台湾長老教会の協力のもと、ブヌン・アミ・タイヤル族などの先住民教会を拠点に、その文化と歴史と沖縄との関係等の学びを行いました。韓国では、植民地時代の関連施設を訪問、神社参拝の強制や独立運動への弾圧、日本軍「慰安婦」の問題、民主化運動の拠点として知られるヒョアン教会との交流を通して、信仰と政治との関係を学びました。



ラオスの子どもたちとの交流



④ 覚を育みました。最後に、アイデンティティ教育は、沖縄の平和教育にとって重要です。「うちなーぐち(沖縄の言葉)講座」沖縄の歴史と現代「近代沖縄とアイデンティティ」などの科目で自らの歴史・文化「島んちゅー」の培ってきた精神を学び、学生が世界人権宣言をうちなーぐちに翻訳し、日本語・英語・うちなーぐちによる群読パフォーマンスを「SDGs全国フォーラム2024沖縄」で発表し、複数言語を認識し人権を捉え直す機会となりました。

池袋キャンパスに「尹東柱(ユン・ドンジュ)記念碑」が設置された。1917年、朝鮮に生まれ、日本統治下の1942年、詩人になる夢を抱いて来日。まず立教大学で、その後同志社大学で学びながら、しかし、1943年、治安維持法違反の容疑で逮捕され、収監先の福岡刑務所において、1945年、27歳の若さで獄死した尹東柱。その名が、80年近い時を経て、彼が学んだ学び舎に刻まれたことの意味は、決して小さくない。

立教大学には、先の大戦下、学徒出陣によって、大切な学生たちを戦地へと送り出したという痛みの歴史がある。若き学生たちの将来と夢が、国家の暴挙によって断ち切られていった、その現実を抗えず、無力であったことは、立教にとって深い痛みとして記憶されるべきことであり、それは同時に、学問と信仰の場が若者の尊厳を

守り切れなかったという、私たち自らの歴史的責任をも照らし出している。尹東柱という存在は、立教の痛みの歴史の中にあって、今も、その歴史的責任を問いかけて続けている。立教大学の尹東柱記念碑には、代表作の一つである『たやすく書かれた詩』が刻まれている。この詩を含む、詩集『空と風と星と詩』に遺された、尹東柱の言葉たちを、私たちは尹東柱自身の、自己の内面に誠実であろうとする厳しさと、他者への深い憐れみとして受け止める。尹東柱の言葉は、「真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネによる福音書8章32節)という聖書の言葉と響き合

い、キリスト教教育の根幹に通じるものもある。彼が立教で学んだという事実は、国家や民族を超えて、真理を求める学びは共有されることを、歴史の痛みの中から証しするものにほかならない。

この記念碑の設置を機に、立教大学は、同志社大学、韓国の延世大学と共に、尹東柱が学んだ大学として、協力の関係を結びながら、尹東柱の意志を継承し、横断的な平和教育の実践に取り組もうとしている。かつて、同時代を生き、異なる場所で、戦争と向き合

った大学同士が、過去を相対化するのではなく、痛みを分かち合いながら学びを共にすること…それ自体が、尹東柱が希求した、和解と平和への具体的な一歩であると考えられる。

戦後80年を迎えた今、尹東柱の記念碑は単なる追悼の対象ではなく、「記憶を未来へと開く場」として、私たちに問いを投げかけている。キリスト教学校に課せられていることは、過去を美化することではなく、傷ついた歴史のただ中に立ち、神の前に沈黙し、悔い

改めつつ、なお希望を語ることであろう。「平和を造る人々は、幸いである」(マタイによる福音書5章9節)による福音書5章9節。立教大学の尹東柱記念碑は、その幸いへの道が、忘却ではなく、痛みを抱えた記憶の継承から始まることを、静かに、しかし、確かに語り続けている。

明治初期、日本には数多くのキリスト教系ミッションスクールが設立され、特に長崎はその先鞭をつけた地域であった。これらの学校は当初こそ小規模な教育機関であったが、1900年代に入ると徐々に規模を拡大し、牧師・神父・宣教師・シスターなど宗教者が中心となって運営され、市民社会の中で青少年教育に重要な役割を果たしていった。

女子教育では、西洋的教養と礼節を身につけ、地域に貢献する女性を多く育てた一方、男子学生たちは天皇制

による徴兵義務のもと、信仰と軍国主義の狭間で複雑な葛藤を経験する者も少なくなかった。内村鑑三らが提唱した平和主義に共鳴する若者もいたが、国家的な軍国化の高まりは彼らの立場を困難にし、日清・日露戦争、さらには日中戦争から太平洋戦争へと進む中で、戦争は300万人を超える犠牲者を生み、広島・長崎の原爆投下で21万人以上の被爆者を出し、日本は敗戦を迎えることとなった。

敗戦後、新たな日本国憲法の公布により思想、信条、宗教の自由が保障され、学校教育の現場でも自由の価値が強調された。若者たちは多様な価値観を選択できるようになり、共産主義や社会主義、さらにはさまざまな社会運動へと活動の幅を広げていった。自衛隊創設後も徴兵制は復活せず、大学から社会への進路選択はより自由で広範なものとなった。

戦後の経済復興期には多くの若者が産業の発展に関わり、日本は高度経済成長期を歩んでいくことになる。しかし、その一方で日米安全保障条約をめぐる意見の対立は激しく、大学内では学生運動が暴力的対立に発展するなど社会の緊張は高まり、ミッション系大学での平和活動も以前ほどの輝きを失ったように映る時期があった。

さらに、南太平洋ビキニ水爆実験で第五福竜丸の乗組員が被ばくした事件は全国的な反核運動を引き起こしたが、その運動は政治的立場の違いによって分裂し、被爆者団体も共産系・社会系に分かれて対立を抱えることとなった。この対立構造は今日まで尾を引きつつも、一部の被爆者運動は国際社会から高く評価され、2025年にはノーベル平和賞を受賞するまでに至って

いる。若者たちも核兵器禁止条約の成立に向けた運動に関与するなど大きな役割を果たしたが、必ずしも社会全体として反核意識が統一されているとは言いがたい。近年、中国・北朝鮮の核保有の脅威が強調され、日本国内でも防衛予算の増額や核兵器保有の是非をめぐる議論が高まり、核の傘政策をさらに進めるべきだとする政治勢力も現れている。

このように安全保障環境が不安定化する中、ミッションスクールやミッション系大学に学ぶ生徒や学生が平和主義的価値を再確認し、歴史に学びながら主体的に平和思想を育てていくことが今ほど求められている時代はない。唯一の被爆国として、反核の社会的合意を堅持し、戦後日本が築いてきた平和国家としての歩みを踏み外すことのないよう、確かな良識と判断力をもって未来の針路を選び取ることに期待されている。

チラシ(左)は長崎市での講演会、平和、核廃絶などのテーマで国内外での講演や対話を続けています。

朝長万左男(ともなが まささぶ)は、日本キリスト教団長崎学院評議員、活水学院評議員

アンケート 平和教育の実践

本欄はアンケート回答からの抜粋。(全文は教育同盟HPに掲載。)回答くださった皆様に感謝致します。*回答は55校59件(25年12月~26年1月)

- 戦後80年の今年度に行われた活動
- [小学校]
 - ・沖縄修学旅行(地上戦跡巡り 6年)
 - ・「平和について考える」特別授業(高学年)
 - ・毎朝の礼拝で平和に関する聖書箇所を取り上げる/高学年による児童礼拝
 - ・平和に対する意見や平和の絵の表現(低学年)/戦争についての夏の調べ学習を足掛かりに世界の状況を探る(高学年)
 - [中学校・高等学校]
 - ・礼拝/聖書科授業/修学旅行(国内外)/特別講演
 - ・生徒による礼拝/2学期主題聖句設定「平和を実現するとは」/「戦後80年」掲示板で各新聞の戦争関連記事を掲示
 - ・伝道週間に語り部の方をお招きした
 - ・学校の戦前~戦後を伝える小冊子発行
 - ・夏の出校日「平和を考える日」に生徒による「平和のためのプレゼン」を実施
 - ・探究の時間「原爆から学ぶ平和」を開講
 - ・福岡大空襲を覚える平和礼拝(6月)、

- 8月平和礼拝: 平和を願う週間・月間
- [大学・短期大学]
 - ・7月の礼拝で戦後80年をふまえた説教
 - ・平和学授業、職員研修会、課外活動
 - ・平和学特別演習「ヒロシマ」(現地開催)
 - ・特別講座「永井隆『長崎の鐘』平和への祈り」(大学と中学2年の連携活動)
 - ・(長崎)8/9出校日に平和を表現するイベント開催(スローガン、絵画、ダンス等)
- これまで実践してきた/実践中の活動
- [小学校]
 - ・高校2年生が沖縄平和学習で学んだ「語り部」を初等部HR礼拝で実施
 - ・9月の礼拝で毎日平和の讃美歌を歌う
 - ・総合授業で戦争や原爆の体験談を聴く
 - ・修学旅行(高学年)、文学作品の読み解き
- [中学校・高等学校]
 - ・平和を覚える礼拝(夏期を中心に)
 - ・研修/修学旅行と事前学習(沖縄、広島、長崎、韓国、フィリピン、ベトナム)
 - ・授業(聖書科、国語科、社会科、総合)

- ・特別講演(憲法、平和・人権・共生、戦争体験者、戦場記者、基地の街の調査報告等)
- ・修養会、パネル展、「語り部」体験、「平和・共生論文」執筆、平和提言集発行、絵本展、ワークショップ、献金活動
- ・平和学習部(部活)が国内外活動に参加
- ・ユースピースセミナー参加
- ・映画や演劇の鑑賞、生徒による演劇上演
- [大学・短期大学]
 - ・授業 平和学(平和感、核軍縮)/リベラルアーツ総合(平和)/キリスト教講座(自校の戦時中体験)/キリスト教(聖書の平和思想、積極的・消極的平和)
 - ・礼拝、チャペル・アワー
 - ・平和学習・研修(沖縄、韓国)
 - ・中学校LHRで大学教員が出席授業
 - ・ニューズレターで毎夏「戦争と平和」にかかわるメッセージを掲載
 - ・「アンネのバラ」を用いた礼拝や活動
 - ・(長崎)8/9は「平和祈念礼拝」実施
- キリスト教学校ならではの平和教育とは
- [小学校]
 - ・時代や地域によって変わることのない聖書の言葉を土台としていること

痛みを記憶する場から、平和を学ぶ場へ

—立教大学「尹東柱記念碑」が語りかけるもの—

立教大学 チャペル 中川 英樹

戦後80年を迎えた今、尹東柱の記念碑は単なる追悼の対象ではなく、「記憶を未来へと開く場」として、私たちに問いを投げかけている。キリスト教学校に課せられていることは、過去を美化することではなく、傷ついた歴史のただ中に立ち、神の前に沈黙し、悔い

改めつつ、なお希望を語ることであろう。「平和を造る人々は、幸いである」(マタイによる福音書5章9節)による福音書5章9節。立教大学の尹東柱記念碑は、その幸いへの道が、忘却ではなく、痛みを抱えた記憶の継承から始まることを、静かに、しかし、確かに語り続けている。

保障され、学校教育の現場でも自由の価値が強調された。若者たちは多様な価値観を選択できるようになり、共産主義や社会主義、さらにはさまざまな社会運動へと活動の幅を広げていった。自衛隊創設後も徴兵制は復活せず、大学から社会への進路選択はより自由で広範なものとなった。

戦後の経済復興期には多くの若者が産業の発展に関わり、日本は高度経済成長期を歩んでいくことになる。しかし、その一方で日米安全保障条約をめぐる意見の対立は激しく、大学内では学生運動が暴力的対立に発展するなど社会の緊張は高まり、ミッション系大学での平和活動も以前ほどの輝きを失ったように映る時期があった。

朝長万左男(ともなが まささぶ)は、日本キリスト教団長崎学院評議員、活水学院評議員

このように安全保障環境が不安定化する中、ミッションスクールやミッション系大学に学ぶ生徒や学生が平和主義的価値を再確認し、歴史に学びながら主体的に平和思想を育てていくことが今ほど求められている時代はない。唯一の被爆国として、反核の社会的合意を堅持し、戦後日本が築いてきた平和国家としての歩みを踏み外すことのないよう、確かな良識と判断力をもって未来の針路を選び取ることに期待されている。

チラシ(左)は長崎市での講演会、平和、核廃絶などのテーマで国内外での講演や対話を続けています。

アンケート 平和教育の実践

- 戦後80年の今年度に行われた活動
- [小学校]
 - ・沖縄修学旅行(地上戦跡巡り 6年)
 - ・「平和について考える」特別授業(高学年)
 - ・毎朝の礼拝で平和に関する聖書箇所を取り上げる/高学年による児童礼拝
 - ・平和に対する意見や平和の絵の表現(低学年)/戦争についての夏の調べ学習を足掛かりに世界の状況を探る(高学年)
 - [中学校・高等学校]
 - ・礼拝/聖書科授業/修学旅行(国内外)/特別講演
 - ・生徒による礼拝/2学期主題聖句設定「平和を実現するとは」/「戦後80年」掲示板で各新聞の戦争関連記事を掲示
 - ・伝道週間に語り部の方をお招きした
 - ・学校の戦前~戦後を伝える小冊子発行
 - ・夏の出校日「平和を考える日」に生徒による「平和のためのプレゼン」を実施
 - ・探究の時間「原爆から学ぶ平和」を開講
 - ・福岡大空襲を覚える平和礼拝(6月)、

